

第IV部門 色彩分析にもとづいた地域住民と来街者の駅周辺地区のイメージ

大阪工業大学大学院工学研究科 学生員 ○村元 至穂
大阪工業大学都市デザイン工学科 正会員 田中 一成

1. はじめに

多くの都市では、住宅や商業施設だけでなく病院や市役所、学校などといった都市機能が郊外に無秩序に拡散している。それによってシャッター街にみられるような中心市街地からは人が少なくなり、まちの活力や楽しみ、賑わいが失われていることで中心市街地が空洞化することによる都市の希薄化が進行している。

こういった状況が継続すると、車を利用できないお年寄りなどが公共公益施設や店舗などを利用しにくくなるといった生活利便性の低下、人との交流や賑わい文化などの機能がなくなりまちとしての魅力が失われると考えられる。

一方、観光都市といわれながらも、観光地までの動線は優れているものを持ちながら、まちのノード（結節点）となる場所は十分に機能していない都市がある。来街者がノードに立ち寄ることは少なく、その地域に対して利益をもたらしていないことが考えられる。これらノードとなる可能性が高い地区は、駅といった公共交通に恵まれた地区であり、公共交通機関に恵まれた地区と考えられる。このような駅周辺に利益がもたらされることでその地域の発展に繋がると考える。

2. 研究の目的

本研究では、都市を駅周辺に集約していく中でその地域が目指すべき方向性を決定していくためには地域のイメージや来街者の動きを知ることが重要であると考えた。そのため、本研究は地域におけるイメージと同時に駅周辺のイメージを抽出し、来街者と地域住民の具体的な差異を明らかにすることを目的とする。

3. 研究方法

本研究の対象地は、周辺にいくつかの寺院や神社といった歴史的な建築物などが点在している奈良県桜井市桜井駅周辺とした。調査方法としては駅周辺でア

ンケート調査を実施した。アンケートは桜井市や桜井駅周辺を利用するときに抱く気持ちについて、SD法によるもの、イメージする形状や色彩によるものを抽出した。

4. 調査結果

I. 思いつく言葉

まず、桜井駅や桜井と聞いて思いつく言葉の結果として地域住民や来街者ともに山・森や林と神社・寺・教会といった言葉が連想されやすく、オフィス・事務所・会社は連想されていなかった。この結果仕事などではなく観光などで訪れていることが結果からも分かる。

II. 市や駅周辺に抱く感情

SD法を用いて調査および因子分析をおこなうことによって、桜井市や駅周辺に抱く感情について評価をおこなった。

調査の際に用いた形容詞対と因子分析の結果を表1に示す。

表1 因子分析の結果

		地方性	のどかさ	賑わい
しずかな	— うるさい	0.370	0.002	0.846
あかるい	— くらい	0.649	0.199	-0.295
うれしい	— かなしい	0.785	0.148	-0.189
ごてごてした	— すっきりした	-0.409	0.446	-0.205
はげしい	— おだやかな	0.025	0.541	-0.503
快適な	— 不快な	0.807	-0.076	0.089
やわたかい	— かたい	0.723	-0.079	0.018
きびしい	— やさしい	-0.694	0.200	-0.117
複雑な	— 単純な	0.090	0.839	0.079
軽い	— 重い	0.507	-0.433	-0.130
ぼんやりした	— はっきりした	-0.503	0.089	0.455

この形容詞対から3つの成分（地方性、のどかさ、賑わい）を取り出すことができた。次に、図1に来街者と居住者の各因子に対する平均点の結果を示す。



図 1 地域住民と来街者の結果

結果として桜井の地域住民と来街者などで異なった傾向が見られることがわかる。さらに、来街者のうちで学生などの年代については賑わいを感じていること、20～39歳の地域住民は地方性を感じておらず、のどかさを感じていることが明らかとなった。

III. 形状のイメージ

アンケートで使ったイメージを表わす形状とその結果を表 2 に示す。

表 2 イメージ形状と選択率

選択率	23.9%	23.0%	19.5%	17.7%	14.2%	13.3%	12.4%	10.6%	9.7%	8.8%	7.1%	6.2%
形と番号	1	10	2	6	7	4	3	9	8	11	5	12
選択率	32.4%	21.6%	17.6%	17.6%	17.6%	16.2%	14.9%	13.5%	12.2%	12.2%	2.7%	2.7%
形と番号	1	10	6	7	8	2	9	5	3	4	11	12

表 2 の上は地域住民の、下は来街者の割合を示している。結果をみると、両者とも丸みを帯びた形、柔らかい形状がイメージされていることがわかる。言葉では捉えきれていない、雰囲気を捉えることができる。ただし、形状からは来街者と居住者との差異を見ることができない。

IV. 色彩のイメージ

アンケートの際に使用した色彩と、来街者および地域住民の選択結果を表 3 に示す。

表 3 色彩と選択率

色	1	2	3	4	5	6	7	8	9
地域住民	6.2%	34.5%	11.5%	19.5%	11.5%	7.1%	14.2%	23.0%	14.2%
来街者	13.5%	43.2%	13.5%	13.5%	5.4%	16.2%	20.3%	23.3%	20.3%
色	10	11	12	13	14	15	16	17	18
地域住民	9.7%	5.3%	4.4%	8.0%	13.3%	21.2%	23.9%	5.3%	3.5%
来街者	8.1%	4.1%	1.4%	9.5%	10.8%	23.0%	18.9%	5.4%	1.4%
色	19	20	21	22	23	24	25	26	27
地域住民	11.5%	15.0%	13.3%	15.9%	8.0%	3.5%	6.2%	5.3%	15.9%
来街者	4.1%	13.5%	17.6%	16.2%	10.8%	4.1%	4.1%	5.4%	18.9%
色	28	29	30	31	32	33	34	35	36
地域住民	20.4%	7.1%	9.7%	12.4%	12.4%	13.3%	13.3%	5.3%	7.1%
来街者	20.3%	24.3%	5.4%	14.9%	5.4%	17.6%	23.0%	8.1%	10.8%
色	37	38	39	40	41	42	43	44	45
地域住民	22.1%	8.0%	10.6%	9.7%	5.3%	7.1%	7.1%	14.2%	10.6%
来街者	23.0%	18.9%	4.1%	12.2%	5.4%	1.4%	6.8%	1.4%	8.1%
色	46	47	48	49	50	51	52	53	54
地域住民	4.4%	15.0%	11.5%	21.2%	11.5%	13.3%	8.0%	8.0%	2.7%
来街者	12.2%	4.1%	23.0%	25.7%	20.3%	10.8%	17.6%	4.1%	4.1%

結果は、全体として 2（＊色彩記号）が最もイメージされやすいことがわかる。さらに、来街者については日本の伝統色にあたる 19（＊色彩記号）や 44（＊色彩記号）は桜井周辺などで思いついた言葉で神社などを連想しているにも関わらず、言葉と結びついていないことがわかる。連想されていないことがわかった。

5. おわりに

アンケート調査の結果から、地域住民は神社や寺など歴史的な要素を一つ一つの要素だけでなく周辺の街並みを含めたエリアに対して歴史的（伝統）のイメージの手がかりに連続したまりのイメージを持っていると考えられる。

また、来街者は神社や寺などの歴史的な要素・観光資源に対し、そのポイントだけのイメージを持っていると考えられる。このイメージは一つ一つ独立して周囲と切り離されている可能性がある。

今後は、他の観光都市と比較し、居住者の属性による比較を行う必要がある。

6. 参考文献

- 1) 令和 4 年版高齢社会白書、内閣府
- 2) 国土交通省、よくわかる中心市街地のまちづくりーコンパクトなまちづくりを目指してー、
- 3) 国土交通省 都市・地域整備局、『集約都市構造の実現に向けて』と都市交通施策と市街地整備施策の戦略的展開